

# がん患者と家族に対する緩和ケア提供の現況に関する調査（概要）

－地域がん診療連携拠点病院における取組を中心に－

厚生労働省政策統括官付政策評価官室 アフターサービス推進室

## 調査の趣旨

### 【目的等】

・地域がん診療連携拠点病院における患者と家族への緩和ケア提供のうち効果的な連携がとれている取組を調査し、広く医療関係者等に情報提供すること

→上記の効果として国民に対し緩和ケアが「より良く生きる1つの方法」との理解が広まることを期待

### 【調査先】

日本海総合病院（山形県酒田市）、川崎市立井田病院（神奈川県川崎市）、聖隷三方原病院（静岡県浜松市）、市立豊中病院（大阪府豊中市）、松江市立病院（島根県松江市）

## 調査の背景

### 【緩和ケアとは】

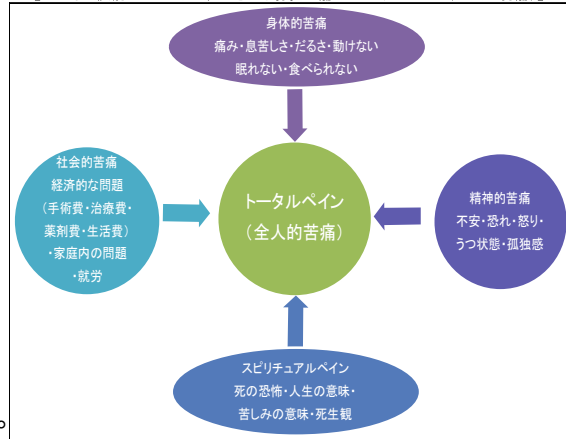
トータルペイン(全人的苦痛)に直面する患者と家族がよりよい生活を送れるように、各種の苦痛を和らげ、生活の質(QOL)を向上させるために行われるケアである。終末期のみに提供されるものと誤解されていることもあるが、がんと診断された時から患者と家族に寄り添って提供されるものである。

### 【現状と国の政策】

・がんの治療中や療養中の患者のうち3割～4割は苦痛が十分に緩和されていない(平成27年患者体験調査による)。

・「がん対策推進基本計画」(平成24年6月)において「がんと診断された時からの緩和ケアの推進」を重点課題とし、政策を進めている。

【がんなど疾病によって引き起こされる各種の痛み トータルペイン(全人的苦痛)】



## 調査結果

### 状況に応じた緩和ケアを提供する取組

※具体的な事例は別紙で紹介

#### 診断・告知時【専門の看護師による相談窓口】

・「がん看護外来」(聖隷三方原病院等)：がん看護専門看護師、緩和ケア認定看護師、がん化学療法看護認定看護師が患者と家族の不安に早期から対応

#### 通院時【緩和ケア外来】

・「がんの治療と緩和ケアの併診」(井田病院等)：がんを治療する主治医と緩和ケア内科医の連携の下、積極的治療時から緩和ケアを実施

#### 入院時【緩和ケアチーム、緩和ケア病棟】

・「緩和ケアチーム」(井田病院等)：患者と家族が感じる心身の苦痛に専門性を活かして適切に対応

・「緩和ケア病棟」(松江市立病院等)：患者が自分らしく過ごせるための環境

#### 退院時【退院手続担当部署】

・「患者と家族へのアセスメント」(聖隷三方原病院等)：患者と家族へ退院後の生活イメージを確認し、退院支援のスタッフで共有

#### 在宅療養【地域の医療機関、介護施設】

・「在宅療養患者を支援」(日本海総合病院等)：緩和ケア医師が往診を実施

・「緩和ケア勉強会」(豊中病院等)：在宅療養に関わる職種の相互理解を促進

### がん相談支援センター※の取組

※全国の地域がん診療連携拠点病院に設置

#### 【がん治療や療養生活全般に関する相談】

治療や療養の情報、経済面・就労等の不安、セカンドオピニオンなどの患者と家族の悩みに相談員が無料で対応

#### 【がんサロン・患者会の実施、アピランスケアの案内】

＜がんサロン・患者会＞ がんの患者と家族が情報交換や気持ちを共有する場

・「ハートフルサロン松江」(松江市立病院)：患者と家族を心理的に支援

＜アピランスケア＞ がんの治療に伴う外見変化の悩みに対応

・「治療の時期に応じた説明」(日本海総合病院)：ウイッグ等を具体的に案内



【がん看護外来の案内】 聖隷三方原病院



【がん診療サポートチームの案内】 日本海総合病院



【訪問診療で使用する車】 川崎市立井田病院



【緩和ケア勉強会】 豊中市立豊中病院



【ハートフルサロン松江の案内】 松江市立病院

## 緩和ケア病棟での支援の例 (川崎市立井田病院)

[Aさん(40代、女性)の希望: 幼い子どもが2人いるため、通院で痛みを和らげながら自宅で家族と過ごしたい]

### <Aさんの状況等>

- ・Aさんは胃がんの診断を受けてから、抗がん剤治療を受けるために通院していた。
- ・Aさんは病状に応じて一般病棟に入退院も繰り返しており、早期の退院と、自宅で療養する姿をできるだけ家族に見せたくないとの思いから、通院治療を希望していた。

### <Aさんへの対応等>

- ①Aさんが一般病棟から退院する際は、担当の診療科が栄養剤等を調整し、通院治療しながら自宅で過ごしていた。
- ②Aさんの痛みが強くなり、緩和ケア病棟に入院とし、緩和ケアチームが痛みを和らげる注射等の治療を行った。
- ③Aさんは一度退院した後に通院となっていたが、病状が悪化してしまい、在宅療養を準備するため緩和ケア病棟に再入院となった。
- ④Aさんの入院中は、緩和ケア病棟で行っていた医療ケアを自宅でも継続するために、緩和ケアチームが栄養剤の調整や痛みを和らげる薬剤を調整し、訪問看護師が自宅での看護体制を整え、Aさんは再び退院となった。

OAさんは希望していたように、家族に見守られながら亡くなるまで、自宅で過ごすことができた。



[緩和ケア病棟のテラス]



[緩和ケア病棟の病室]

## 在宅療養患者の支援の例 (日本海総合病院)

[Bさん(60代、女性)の希望: 身体の痛みとむくみの症状を和らげながら、在宅医療を受けて自宅で過ごしたい]

### <Bさんの状況等>

- ・Bさんは胃がんを発症し、手術と化学療法を受けた後に症状が進行し、痛みとむくみが強くなってしまった。
- ・これから自分の身体が衰弱していくことに不安を感じ、在宅医療を受けたいと希望していた。

### <Bさん、家族への対応等>

- ①緩和ケア外来でBさんを診察し、緩和ケア医師から痛みに対する薬剤の処方を行い、緩和ケア認定看護師からむくみの状態が悪化しないよう、Bさんと家族にスキンケアの指導等を行った。
- ②Bさんの家族は在宅療養に対する不安を抱えており、緩和ケア認定看護師が家族の思いを聴き、助言などを行った。
- ③訪問看護ステーションのスタッフがBさん宅を訪問する際に緩和ケア医師が同行し、在宅医の手配など在宅療養に必要な医療ケアについてBさんと家族の相談に応じた。

OBさんは亡くなるまで、苦痛が最小限になるよう在宅医のケアを受けながら自宅で過ごすことができた。



[在宅療養のパンフレット]



[診療室]

## がんサロンの参加者(患者・家族等)の声 (松江市立病院)

- ・入院した頃は、サロンもなく、昼間、1人になると不安と恐怖で頭と気持ちの釣り合いが取れず、パニックになってしまって…。現在はサロン、相談支援センターもあり、心強いです。
- ・入院中からサロンに参加させてもらって、悲しい、つらい気持ちを聞いてもらいました。そんなあたたかい気持ちはいまでも忘れません。サロンに出会えなかったら、いまの自分はなかったように思います。感謝の気持ちでいっぱいです。  
(ハートフルサロン松江)



[がんサロンの会場]